

近世文書論序説（上）

——近世文書の特質とその歴史的背景についての素描——

大 藤

修

目 次

一 大量作成

(一) 村・町を媒介にした文書による統治

(二) 官僚制的な統治機構の整備と執務の文書主義

(三) 商品貨幣経済の発展による文書主義の社会への浸透

二 種類の多様化

三 形態の多様化——書付型文書の略式化と多様な冊子型文書的大量出現——

(一) 切紙文書と継紙文書の多用

(二) 冊子型文書的大量出現と多様化（以上、本号）

四 料紙の多様化と簡便化（以下、次号）

五 花押の略式化と印判使用の普及

(一) 花押の形式化と武士層の印判使用

(二) 庶民への印判使用の普及

(三) 血判・爪印・拇印の使用例

六 書風・書体・文体・用字・用語の標準化と男女差

(一) 書風・書体・文体の標準化

(二) 漢字主体文の普及と女性の平仮名主体文

(三) 書き言葉の標準化と話し言葉の地域差

七 幕府・藩の役所、村・町、家、講、寺院、神社等に蓄積・保管——文書管理・伝存形態の特徴——

近世文書を総体として観察した場合、そこにどのような特質を見出だすことができるであろうか。そして、それはどのような歴史的な背景、理由によってもたらされ、またいかなる歴史的意味、意義を有していたのであろうか。本稿は、このテーマについて諸先学の研究成果に学びつつ素描を試み、今後近世文書論を深めていく上での研究の視角と課題を探ることを企図するものである。⁽¹⁾

一 大量作成

近世においては、前代とは比較にならないほど文書の作成量が飛躍的に増加している。その歴史的背景、理由としては、すでに諸氏の指摘しているところであるが、(一)村・町を媒介にした文書による統治、(二)官僚制的な統治機構の整備と執務の文書主義、(三)商品貨幣経済の発展による文書主義の社会への浸透、をあげることができよう。そして、文書作成の必要性の増大は文字を読み書きできる識字層を拡大していくことになった。

(一) 村・町を媒介にした文書による統治

周知のように、近世の幕藩制社会は兵農分離を原理として成立している。中世の在地領主制は否定され、武士は城下町に集住させられた。それに伴い、武士の生活上、軍事上の必需物資を調達するために商工業者も城下に集められ、町に居住せしめられた。そして、こうした職能（職業）の分離にもとづき、家を単位に武士・百姓・町人という身分秩序が固定され、人々はその家かの成員として、特定の居住空間においてそれぞれの身分固有の父子相伝の職業（家職）に従事するところとなった。

同一身分集団ごとに空間的に隔絶して日常生活を営んでいた社会体制のもとで、支配階級である武士と被支配階級の百姓・町人との間の意思の相互伝達の機能を担ったのは文書である。すなわち、幕藩領主の命令は文書にしたためられ、村役人、町役人を通じて一般の百姓・町人に伝達され、百姓・町人の訴えや願いごとにも文書によって上申された。こうした支配体制は、村役人や町役人を務めるような百姓・町人の上層では文字の読み書き、計算能力を有していたことが前提になる。

網野善彦氏の論考によれば、一三世紀後半には侍の下層はもとより、平民百姓の上層にまで文字は普及しつつあり、南北朝から室町期にかけて識字層は飛躍的に拡大し、村落の上層、商人の世界においても文字が自由に駆使されるようになっていたという。しかも、平仮名と漢字によって書かれる文書が、九州から東北まで様式、文章表現の同一性をもって普及していた事実を指摘されている。^②このような文字・文書の社会への普及、使用文字、様式、文章表現等の全国的な斉一化という事態が、兵農分離を原理とした近世幕藩制社会の成立、幕藩制国家の文書による人民統治を可能にした歴史的前提条件となっていたわけである。

律令国家が文書によって全国統治を行って以来、その後の王朝国家、さらに鎌倉幕府、室町幕府も文書主義を受け

継いだのであるが、近世幕藩体制の確立に至り、文書による統治は右のような条件を前提に末端の村、町にまで貫徹するところとなった。それは、民衆の間に文字をさらに普及させ、かつ読み書き、計算能力を高める契機となる。⁽³⁾

イギリスなどでは民衆が識字能力を持つと反権力につながるおそれがあるとして、貴族階級が民衆への教育の普及を徹底的に妨害したため、民衆教育の発達は一九世紀の半ば、産業革命以降にまで遅れてしまったという。⁽⁴⁾これに比べ我が国の近世領主たちは、民衆教育を禁止するようなことはしておらず、むしろ近世中期以降は民衆教育を奨励し、幕府や藩の出した法度や教諭書を読み書きのテキストに使わせるなどして、支配の徹底をはかっている。幕藩領主はあくまで「よらしむ」ための手段として民衆教育に期待を寄せたのであるが、しかし民衆の間に識字能力が広まることは、権力者の思惑を超えて、民衆に様々な能力を開かせ、それが自律的に展開することにもなる。

民衆の多くが文字を解するようになれば、確かに文書による統治は行いやすくなる。しかし、文書による統治は、権力側も文書に明示した自らの意志に規制されざるをえない側面を不可避免的にもつ点を看過してはならないだろう。民衆の識字能力が高まれば高まるほど、統治の円滑化の反面、下からの規制力は強まらざるをえない。つまり、民衆が権力側の明示した規範・規準を正当化の根拠として自らの要求を突きつけたり、あるいは権力側が自ら示した規範・規準に背くような非法・非分を犯した場合、民衆が権力の示達した文書を抛りどころに、指弾、抵抗することが多くなるのである。幕藩領主は年ごとの年貢量を年貢割付状に記して村単位に賦課し、納入の連帯責任を負わせたが、それは一方で、自ら明示した額以上に取り立てることを不可能にする。そして、毎年の年貢割付状が系統的に農民のもとに保存されれば、領主が不法に年貢を増徴しようとするとき、農民側が過去の年貢負担量を基準にその非分を指弾し、抵抗するための根拠となる。また、「年貢さへすまし候得ハ、百姓程心易きものハ無之」(慶安二年 一六四九)の幕府触書と領主が説き、農民に年貢の皆済を奨励するとき、領主側は同時に、農民が百姓身分としての役儀を果

たす以上、その生活を保障せねばならない責務を自らに課すことになり、もしその責務に背いて農民の生活を危殆におとしめたならば、指弾されてもよんどころない根拠を与えたことにもなるのである。

兵農分離によって確かに武器は武士の独占するところとなったが、逆にみれば農具は百姓の独占に帰したのであり、生産から切り離された武士にとっては、百姓を保護し、農業生産力を安定・発展させることが、自らの生活を維持する上で必須の要件とならざるをえなくなった。村を百姓たちが生産・生活を営む場として確保し、毎年の年貢負担量を定量化して文書に明示させ、しかも幕藩領主をして百姓の保護を文書で明言させるようになったことは、ある意味では、中世を通じての百姓たちの闘い、および文化水準の向上によってもたらされた歴史的成果であったともいえる。

網野氏は、近世において民衆が文字によって自らの意志を表現しえるようになったことの積極的な意義、その身につけた知恵と独自の文化の成長を評価しつつも、結局は国家による文書主義の枠組をついに突破しえず、世界でも稀にみるといわれるほどの専制的な国家を三〇〇年にわたって支えつづけたという事実を見すえなくてはならないことを強調される。⁽⁵⁾確かにそれは一面の真理ではあろう。しかし、近世民衆の文字社会が幕藩制国家の文書による専制的支配を長きにわたって支えつづけたと断ずるのみでは、不十分ではなからうか。なぜなら、国家支配の文書主義と民衆との関係を考察する場合、民衆が国家の文書による統治システムを逆に自らの権利・生活を守るためのシステムとしてどの程度機能させていたか、という視点も組み込む必要があるからである。さもないと、結局のところ、近世の民衆は国家の文書による統治に馴致され、専制的支配に服従していたという一面的理解に陥り、文書による統治システムの民衆にとっての意味が見落とされてしまう。したがって、近世の民衆が統治にかかわる文書を自らの権利・生活を守る根拠としてどのように活用していたか、そして幕藩制国家の統治システムを下からの規制力でもって自らの

利益擁護のためにどの程度機能させていたか、という点を注意深く検証していく必要がある（この点は、これまでの近世民衆闘争史の研究においても、ある程度明らかにされているところである）。

ところで、幕藩制国家は村を媒介に村役人を通じて文書によって百姓を統治していたのであるから、その下で一般の小前百姓が自分たちの権利・利益を守るためには、彼らも文字を我がものとし、村役人の不正を阻止するとともに、自らが村政運営の主体となることが必須の要件とならざるをえない。例えば、村単位に文書によって課された年貢・諸役は村役人が村内の個々の百姓の持高に応じて配分し取り立てるが、小前百姓たちが文字を解せなければ、村役人から不正に割り付けられ取り立てられてもわからないわけである。近世前期には周知のように、村役人に対し小前百姓が年貢・諸役の割付・取立・勘定関係の文書の公開を迫り、不正を糾弾するといった村方騒動が各地で頻発している。この事實は、近世前期には村役人の不正が発生しやすい状況にあったことをうかがわせると同時に、小前百姓のなかにも文字を解する者が出現していたことを示しているよう。

地域によって差があるとはいえ、遅くとも近世中期には、特定の上層百姓のみならず、一般の小前百姓たちも村としての意思を決定する寄合に参加し、惣百姓の意向によって村政を自治的に運営する村が全国的に増えてくる。こうした惣百姓による村の自治は、村政運営、村の権益にかかわる文書が惣百姓に公開され、彼らがそれを解せるようになっていくことを前提にして、はじめて成り立ちうるものであろう。近世中期以降惣百姓の入札によって村役人を選出する村が多くなっているが、入札が公正に行われるためには、個々の百姓が読み書きできることが要件となる（一部の上層百姓が代筆したのでは、不正がなされる余地が生じる）。

近世後期には、小前百姓層のなから、「小賢しき者」「口利きの者」などと呼ばれる、弁舌と訴訟の技能に長けた者が輩出し、小前惣代として村役人や領主と対決した。彼らのなかには、独自の思想を形成し、それを文章として表

現する者さえ現れた。こうした支配者、村役人の目には「小賢しき者」と映るような、自己の生活や小前層の利益の擁護のために縦横に能力を発揮しうる人物の輩出は、識字能力の小前百姓層への浸透が社会的基盤となっていただろう。

識字層の社会的拡大はまた、民衆が独自に情報を広範にわたってやりとりする上でも役に立った。「よらしむべし、知らしむべからず」を原則としている幕藩体制的統治の下にあって、政治・社会・経済の動向に関する公式の情報伝達媒体は幕府や藩の発する触であった。しかし、近世中期以降、全国的な商品流通の展開に伴い、民間においても書状のやりとりが活発化し、それによって遠隔地の商品相場や政治的・社会的事件も伝達されるようになった。権力がいくら出版統制をしようとも、私的な書状のやりとりまで規制することはできない。⁽⁸⁾近世中期以降、商人や農民が独自に入手した様々な情報を記録することが盛んになり、それが今日にも多く伝わっている。⁽⁹⁾

村・町、さらには領域をも越えた民衆間の自律的な情報流通は、「世論」形成の社会的基盤となり、それが幕政や藩政をも左右するようになった。そして、民衆の政治的・社会的視野の広まり、政治・社会意識の高揚は、幕末・維新期に草莽の志士を輩出させる社会的素地となり、尊攘・討幕運動の広い裾野を形成するところとなったのである。⁽¹⁰⁾

また文化面においても、民衆の文字受容と識字能力の向上を機に民衆独自の文字文化を花開かせ、それが近世の文化を特色づけていることは周知の事実である。

民衆の多くが文字を我がものとするによりどのような能力を自律的に開発したか、そしてそれはどのような意味・意義をもったのか、この点を階層差、性差も含めて多面的に考察しなくてはならないだろう。

(二) 官僚制的な統治機構の整備と執務の文書主義

戦国大名の段階では大名個人の能力、才覚によって領国経営を行っていた面が強く、天下を統一した豊臣政権も秀吉という一個のカリスマ的人格に支えられていた。それは政権としての意思決定とその伝達方法によく示されている。すなわち、両者にあつては、大名・秀吉の直裁で政策や法が決定され、大名・秀吉自らの名において発給する直書でもって下達された。

これに対し、幕藩体制の確立に伴い、幕府も諸藩もその機構を官僚制的に整備し、機構よって統治を遂行するようになった。幕府、藩としての意志決定も機構的にシステム化され、幕政、藩政それぞれの統轄者である老中、家老あるいは担当役人の発給する文書でもって、所定の経路を通じて伝達されるようになった。¹¹¹²それに伴い、將軍や大名の直書は、領知・知行の宛行、あるいは音信贈答の儀礼的用途などに限定されていた。

ところで、官僚制は、規則に従つて事務を処理する技術的合理性によって特色づけられる。すなわち、官僚制機構においては、職務の分掌が規則化され、職員は規則に従つて機械的に執務することが求められ、個人的な恣意・主観をさしはさむことは否定される。そして、執務の客観性、公正を保障するために、文書という客観的な情報伝達・記録手段によつて職務が執行されることになる。¹³

幕藩制国家の官僚制は身分制、家格階層制を前提にしており、幕府・藩の役人に任用されるのは武士身分に限られ、しかもどの役職に就けるかは武士身分内部の家格階層制に規定されている。その点では近代的官僚制とは異なるものの、幕府・藩の機構はかなり高度に合理的に組織されており、職務分掌が体系化され、役人は規則に従い文書によつて職務を執行している点では、官僚制機構としての特質を相当程度備えている。その結果、幕府や諸藩の運営の過程で膨大な文書が発生するところとなったのである。

別の角度からみると、巨大な官僚制的統治機構を構築しなくては国家の統治を遂行しえないような歴史的段階にあったのが、日本の近世ということになる。中世社会は自力救済を原理としていた社会で、様々な社会集団が武力を持ち、また警察・裁判権なども持つて強い自律性を保っており、国家の統合力は弱かった。幕藩制国家は、中世末の権力分散の状況を克服し、従来それぞれの社会集団が担っていた諸機能を国家に吸収して、社会を統合する方向で成立してくる。したがって、国家の公権を担うこととなった徳川幕府と諸藩は多様な機能を集中的に果たさなくてはならなくなり、それを迅速に遂行しうる合理的なシステムを機構的に確立する必要に迫られたわけである。したがって、幕府および諸藩の機構の形成・展開と職制、職務執行のシステムを分析したうえで、職務の過程でどのような文書が作成され、組織内部においてあるいは対外的に授受されたか、そして文書はどのように管理されていたかを、体系的・系統的に考察する要がある。

ところで、官僚制的機構に組み込まれ、行政官としての職務を担うことになった近世の武士は、もはや単に武芸に秀でているだけでは武士としての職分を果たせなくなり、読み書き計算能力を身につけることが要請されることになった。武家の子弟を家塾や私塾に通わせて教育を受けさせることが盛んになったのは、そのためである。ことに幕藩体制の危機が顕在化してきた一八世紀後半以降になると、諸藩は藩校を設け、藩として有能な人材の育成に努めるようになる。さらに一九世紀に入り、経済構造の変質と民衆闘争の高揚、欧米列強の外圧などにより幕藩体制の危機が深まると、それを乗り越えるために伝統的な格式よりも武士の職分を果たしうる能力を重視する傾向が強まり、下級武士が大量に要職に登用されることとなった。そして、幕藩制的秩序にとらわれていてはもはや日本国の存続と発展は期しえないと自覚されたとき、武士自らがそれを否定する結果となった。

新たに形成された国家の政府が比較的スムーズに機能しえたのは、初期の国家官僚を構成した士族たちがすでに幕

藩制のもとで行政官僚として実務的訓練を受けており、必要な知識、技能を身につけていたことに負うところが大きかったのではなからうか。また、末端で行政を担った戸長や区長も、幕藩制下の村役人、町役人として文書による行政事務能力を培っていた。例えば壬申戸籍が短期間で全国一斉に調製された一事をとってみても、その事務処理の迅速さには驚くべきものがある。我が国における近代国家の建設として、近世における行政の徹底した文書主義のもっていた意味・意義は大きいものがあつたと考えられよう。

(三) 商品貨幣経済の発展による文書主義の社会への浸透

桜井英治氏の論考⁽¹⁵⁾によると、商人の世界では一三世紀までは「音声の世界」に属する「古法」「古実」（口頭で伝承された商い慣習）によってその秩序が保たれていたのが、一四世紀以降、商人の世界にも文書主義が浸透し、証文をはじめとする文書が作成されるようになったという。

近世に入ると商業はいつそう発展し、商取引の仕組みも複雑化する。それに伴い、多種多様な文書が大量に発生することになった。商取引は各種の証文の取り交わしによってなされ、商取引の状況、収支勘定、資産の増減、奉公人の勤務状況などは克明に帳簿に記録される。帳簿によって経営管理、人事管理がシステマチックになされたという点では、近世の商家経営は近代の企業経営に通じるものを備えている。今日に伝存している豪商の文書群はきわめて庞大であり、しかもそれすら実際に作成ないし受領された文書のすべてではなく、不用となったものは廃棄され、選別保存された結果の文書群である。これをみても近世の商業が徹底した文書主義によって営まれていたことが知られる。近世においては商業は城下町商人によって担われるのが原則であつたが、一七世紀末以降、農村にも商品貨幣経済が浸透し、農民のなかにも商業を営む者が出てくる。農家に伝来した近世文書の中には商業活動にかかわる文書も多

く含まれている。また、商品貨幣経済の進展によって金銭の貸借、土地の売買・賃入れも盛んになり、その際には証文が取り交わされた。小作契約や奉公契約も文書によってなされるようになった。¹⁶⁾

こうしてあらゆる社会的・経済的行為に文書主義が浸透していくと、文字を識らなければ不利益をこうむり、自己の利益・権利を守れなくなる。例えば、証文に自分に不利益なことを書かれても、それを読めなければ後で気づいても泣き寝入りせざるをえないわけである。また年貢・諸役も、村単位に課されたあと、村内部では個々の百姓の持高に応じて割り付けられるので、読み書き計算ができないと、余計に負担させられてもわからない。つまり、近世においては、支配の仕組みの面からも、社会生活の面からも、読み書き計算能力を持つことを人々は要請されることになったわけである。

近世中期以降、民間の教育機関である寺小屋や私塾が全国的に急激に増加しているが、それは読み書き計算ができないと一人前の人間として家業や社会生活を営めないような状況が生まれていたことを示している。¹⁷⁾そして、新たな社会集団を生成させる契機ともなった。すなわち、共に学んだことを機縁に筆子中が各地に簇生し、また地域的な文人結社も多く生まれ、それが新たな生活・文化を創造していく基盤ともなったのである。

一家の長ともなれば、先祖伝来の「家産」を守り、「家業」を維持・発展させる責任を負い、また家を代表して外部との交渉や交際にあたりたり、村・町の寄合に出席して村政・町政の運営に参画しなくてはならない。当然、家長としての任務を果たすには、読み書き計算能力を身につけることが不可欠となる。女性も、主婦となれば、家長の夫とともに家の存続に責任を負い、夫が死去し子供が幼少の時は自ら家長となって家業を維持しなくてはならなかった。また地域の人々や親類との交際にもあたる。女性といえども、ある程度の識字能力を持つことは要請されただろう。跡継ぎ以外の男子は分家するか、他家に養子に入っていずれその家督を相続するか、あるいは商家や豪農の家の奉公

人となり、そこで別家させてもらうかしたが、いずれにしても将来一家の長となるには、それに必要な知識・技能を身につけておかななくてはならない。おそらく、社会への文書主義の浸透の趨勢のなかで、子女に読み書き計算能力を身につけさせることは、親としての責務だという自覚が社会的に広く生まれたものと思われる。

一七世紀後半以降、小百姓の家の経営的、社会的自立性が強まり、彼らも主体的な「家」意識⁽¹⁹⁾、「家」永続の希求を強く持つようになった。また、村内での政治的・社会的・経済的諸権利を獲得し、村政運営の主体ともなった。小百姓たちの家と村の存続に対する主体的な責任意識、これこそが、商品貨幣経済の発展という社会経済的条件のもとで、民衆社会に次代の家と村の担い手である子供の教育を普及、定着させていった根源的な力であったのではなからうか。

文字は古くは「聖なる世界」につながる大切な記号と考えられていたという。⁽²⁰⁾ 識字層がごく一部に限定されていた時代にあつては、文字を操れる人物は特別な能力者として畏敬の対象ともなったであろう。しかし、近世に入ると文字は庶民の間にも広く浸透してゆき、それに伴い読み書き計算能力を持つのは一人前の人間たる当然の条件とする觀念が支配的になり、識字者を特別の能力者とみなす風潮は薄らいでいった。逆に、文字を識らない人間が蔑視ないし軽視される風潮すら生まれた可能性もあろう。近世社会における様々な差別の問題を考える場合、識字能力の問題も組み込めば、そこに新たな論点を見出させるかもしれない。

二 種類の多様化

近世に入り大量の文書が作成されるようになったが、それに伴い種類の方も多種多様化した。それは前節で述べた

国家の機能の多様化と社会への文書主義の浸透に起因している。

近世においては、それまで社会的諸集団が有していた諸機能の多くが国家に吸収されたので、国家の公権を担う幕府や諸藩は様々な機能を果たさなくてはならなくなった。しかもその諸機能は官僚制的機構を通じて文書主義によって遂行されたので、必然的に多種多様な文書が大量に発生するところとなったのである。また、支配機構の末端に位置づけられた村や町でも、それに連動して種々の文書を作成するようになっていた。さらに、社会生活の隅々に文書主義が浸透し、しかも社会経済の仕組みも複雑化したために、人々が社会生活を営む過程で多種多様な文書が発生している。

従来の古文書学は様式や機能を基準に文書を類型化することに主眼をおいており、周知のように、古代・中世文書についてはその類型化が精緻化されている。しかし、近世文書の類型化には、いまだ部分的にしか手がつけられていないのが現状である。それには、近世文書は大量かつ多種多様であるため、手に負いかねるという事情が大きくあずかっている。ただ、最近はその整理と目録化が進み、目録自体もかなり刊行されているので、それをもとにして、どのような組織体でいかなる種類の文書が作成ないし受領されたかを把握しうる条件は整いつつある。実際、木村礎⁽²⁰⁾氏の論考のように、文書目録や史料集を利用して地方文書の成立・展開を考察した研究も現れている。

文書の種類について研究する場合、どのような種類の文書がいつ頃、どのような契機で作成されるようになったか、そしていつ頃消滅したかを確定し、その文書の機能や様式を系統的に分析することが、まず第一の課題となる。検地帳、五人組帳、宗門人別改帳、年貢割付帳、年貢皆済目録、村明細帳、村入用帳、御用留など⁽²²⁾については、そうした観点からの研究も出されているが、全体的にはきわめて不十分なのが現状である。

次に課題になるのは、文書相互の関係を明らかにすることである。年貢村請制にかかわる文書を例にとると、年貢

割付状によって領主から村単位に年貢を賦課されてから皆済後に皆済目録を交付されるまで、村内部では、個々の百姓への年貢負担の配分、取り立て、勘定、廻米などの名主の職務にかかわって、免割帳（小割付帳）、年貢受取小形、年貢取立帳、年貢勘定帳、廻米帳等々が作成されている（ただし、支配領域や村によって一様ではない）。したがって、年貢村請制のシステムを解明するためには、それぞれの文書がいつ頃、どのような契機で成立したかを明らかにすると同時に、文書相互の関係の体系を考察することが求められる。²⁴

ところで、文書の種類と相互の関係を把握する場合、組織体のあり方とその機能との関係で考察する要があるう。

なぜなら、文書というものは、純然たる個人的用途で作成されるものを別にすれば、特定の組織体が機能していく過程で必要に応じて作成、授受されるものである以上、その組織体の内部機構、管理・運営のシステムと機能によって、そこで生み出される文書の種類と文書相互の関係が決定されるからである。

我が国の近世においては、朝廷、幕府、藩、村、町、家、組合、仲間、講、寺院、神社等々の組織体が存在し、それぞれの組織体が機能していく過程で、種々の文書が作成され、内部的・対外的に授受されて蓄積されていた。近世の政治・社会体制のもとでの種々の組織体は、原則的には同一の身分Ⅱ職能の者によって構成され、職分に応じた社会的役割Ⅱ機能を果たしていた。おのずから、組織体において作成、授受される文書の種類、およびそこに蓄積された文書群としての性格は、その構成員の身分Ⅱ職能、組織体としての社会的役割Ⅱ機能に規定される。したがって身分Ⅱ職能、社会的機能が異なれば個々の文書の種類、文書群としての性格も大きく異なってくる一方で、それを一にする同一レベルの組織体で作成、授受、蓄積される文書の種類や文書群の性格は、組織を超えて一定の共通性、標準性を持つことになった。例えば諸藩の文書相互、諸村・諸町の文書相互には、一定の共通性が認められる。

しかし他面、それぞれの藩、それぞれの村・町は固有の特性を持っていたことも事実であり、それがまた文書にも

反映していた。すなわち、藩の統治機構の仕組みは領知の規模や形態、所領の地域的特性に規定される面が大きく、それが藩の統治機能にかかわる文書の種類、その相互関係の体系を特色づけることになったのである。統治機構の末端に位置づけられた村・町がその機能にかかわって作成、授受する文書の種類、その相互関係も当然、統治の機構とシステムに規定されざるをえない。²⁵また、自治団体、生活共同体としての村・町の自律的機能にかかわる文書も、村・町の内部構造、自治の仕組み、生産・生活条件等によって地域的あるいは時代的特性を刻印される。したがって、近世に存在した様々な組織体が機能していく過程で作成、授受した文書の種類および文書相互の関係を、組織体を超えた共通面と、その組織体固有の特性面の両者に意を払いつつ考察しなくてはなるまい。²⁶

同様の視点は文書の様式論的研究にも求められよう。文書の様式は、広くみれば、伝統、文化を背景にした社会的慣例、通念などによって規定されているので、ある時代に発生した文書の様式は個々の組織体を超えた共通性を備えている。また、前代の文書の様式とも、断絶面と同時に連続面も持っている。しかし、個々具体的に文書の様式を定めている主体はそれぞれの組織体であることを見落としてはなるまい。個人的な要件で文書を作成する際には、当時の慣例の様式にならいつつも、そこに自己の裁量を働かせることも可能である。しかしながら、組織体の一員として文書を作成するにあたっては、その組織体の定めた様式に従うことが義務づけられる。各自がまちまちの様式で勝手に作成したのでは、組織体の業務に支障をきたすし、またそれが組織体の正規の文書であるか否かを判定しえなくなる。それゆえ、律令国家が大宝令の公式令で文書の様式を定めたのははじめとして、それ以後の国家機関および家政機関、家業経営体、そして現代の自治体、企業体、各種学校、各種団体等々、あらゆる組織体は、一個の組織体として自己を確立し、機構を整備するに伴い、そこで作成する文書の様式を独自に定めたのである。

近世においても、それぞれの組織体ごとに文書の用途に応じて、料紙の種類と形状、書式、書体、文体、判の有無、

判の種類等々、総じて様式を独自に定めている例が多い（幕府と藩、あるいは幕府・藩と村・町という上下の關係にある組織体相互において、下から上に提出する文書については、上位の組織体の指示で様式が定められている）。それゆえ、同一用途の文書であっても組織体によってその様式を異にしている例は多々ある。したがって、近世文書の様式についても、組織体を越えた共通面、標準面と同時に、それぞれの組織体の独自性にも留意しつつ分析しなくてはならないだろう。

ところで、近世においては、身分・格式によって政治的・社会的秩序が規律されていたので、当然のことながら、それが文書の様式にも反映している。

例えば、幕府の諸奉行が老中に差し出す伺書や諸奉行・役所間でやりとりする掛合書・問合書は半切紙が用いられ、日付には元号は書かれず干支か月のみ、差出も署名のみで印や花押は押署されず、宛所も記載されなかった。大名・旗本が幕府に提出する願書・伺書も、相統關係の重要願書が堅紙様式である他は、半切紙文書の様式を具備していた。これに対し、町人身分、百姓身分の者が幕府に差し出す願書などの文書には堅紙が用いられ、元号が書かれ、必ず印が押され、宛所も記された。つまり、幕府内部で授受する文書、武士身分の大名・旗本が幕府に差し出す文書には略式Ⅱ薄礼の半切紙様式が用いられたのに対し、町人・百姓身分の者が幕府に差し出す文書の方は厚礼の堅紙様式であったのである。以上は藤田 覚氏の綿密な考証によって明らかにされたところである。⁽²⁷⁾

また、徳川幕府四代目將軍家綱が寛文四年（一六六四）、同五年に諸大名および公家・寺社に対し一斉に発給した領知判物・朱印状と領知目録の様式を分析された大野瑞男氏の研究によれば、それは宛先の大名・公家・寺社の官位や格式、伝統的歴史的な階層序列と寺社本末關係に則った整然とした位階制的編成に対応していた。

近世文書の様式に身分・格式が色濃く反映していることは近世文書を扱った者なら経験的にわかっていただ

あるが、大野氏や藤田氏の研究の意義は、その具体的分析を実践し、その点を学問的に確証するとともに、さらに様々な知見や論点を引き出しているところにある。文書の様式に限らず、近世文書のあらゆる面について、経験的に何となくわかっているつもりで、学問的検証を実践することなく放置してきた点があまりに多いのではなからうか。そこに近世史研究の陥穽があり、近世文書論がまだ学問的に確立されていない理由の一つとなっているように思われる。わかつているつもり of 事柄を改めて学問研究の対象として分析してみると、それが近世文書についての史料学を發展させていくうえで何よりも求められる姿勢であらう。

三 形態の多様化——書付型文書の略式化と多様な冊子型文書的大量出現——

(一) 切紙文書と継紙文書の多用

文書の形態は大別すれば書付型（一紙物）と冊子型（帳簿）とに分かれる。書付型は、従来の古文書学で、堅紙（堅文）、折紙（折文）、切紙（切文）、継紙（続紙）とに区分されている。堅紙は全紙をそのまま使用したもので、中世前期まではほとんどの文書が堅紙あるいは堅紙を継ぎ合わせたものである。折紙は堅紙を横半分に折って、折目を下にして書いたもので、古代末期より交名や目録など短いものを書く場合に用いられた。中世後期には武家の支配文書や書状にも使用されるようになっていく。発生、普及の理由については、紙の節約とか、持ち運びの簡便さ、手に持ったまま書けるとかの諸説がある。切紙は堅紙を堅または横に切断して用いたもので、南北朝期頃から多くみられるようになる。これには二通りの用例が認められる。一つは簡便さから短文の文書に用いられたもので、例えば荘園文書には堅半切あるいは三分の一に切った年貢請取状が多くみられる。いま一つは小型化ということから

隠密の文書に用いられたもので、南北朝期の譬（もとどり）の繪旨とか小文の御内書と称せられるものがそれで、このほか古今伝授などの秘伝文書にも用いられた（切紙による秘伝伝授は切紙伝授と称せられた）。戦国期以降になると、書状にも横に半切したものをやそれを継ぎ合わせたものがみられるようになる。²⁸⁾

以上からわかるように、折紙や切紙は文書主義の進展に伴いもっぱら実用的観点から生まれた略式の簡便な形式である。近世には先にあげた形式のすべてがみられ、文書の格式、重要度や儀礼上、機能上の考慮によって使い分けられているが、古代・中世文書と比較した場合、そこに見出だされる特徴は切紙文書と継紙文書の比率の高さである。²⁹⁾

それは、近世においては行政面でも社会生活面でも文書主義が飛躍的に進展したため、伝達量の少なくてすみわけではもっぱら略式の切紙が用いられた一方では、多量の情報伝達の必要性も増大し、それには継紙が用いられたからである（後者の面では、後述する冊子型文書的大量出現にも結びついている）。切紙についていうと、近世には豎に切ったものよりも、横に半切した半切紙の方が一般的形態になっている（ただ、手形類には豎切紙が多くみられる）。³⁰⁾

幕府文書の場合、領知判物・朱印状、重要法令を發布する將軍の印判状と老中下知状には豎紙が用いられているが、先述のように、幕府の日常的政務の過程で諸奉行が老中に差し出す伺書や諸奉行・役所間でやりとりする掛合書・問合書には半切紙が使用されている。また、元禄頃より幕令は老中が御書付に記し奥右筆や同朋頭を介して、大目付、目付、三奉行に渡し、それより諸大名の留守居、幕府代官などに伝達するようになったが、この老中御書付には半切紙が用いられた。近世中期以降において幕府から特定の大名に対し個別的用件を伝達する際に発給された老中申渡書もやはり半切紙である。さらに、大名・旗本より幕府に差し出される願書・伺書も、相続関係の重要願書が豎紙であった他は半切紙だったこと、先述したところである。

大名・旗本よりの願書・伺書に対する幕府の回答、幕府内部での下位の役職者からの伺書に対する上位役職者の回

答・指図、異なる役職・役所間での掛け合い、問い合わせに対する応答、上位者からの諮問に対する意見の具申なども、別個に文書を作成することを省略し、もっぱら各種の付箋でもって行っていた。⁽³³⁾これも行政事務の簡略化、合理化の方便であつたろう。こうした伺いと回答、掛け合いと応答（挨拶）という方式がいつ頃形成されたかについては藤田氏はふれられていないが、おそらく近世中期以降に確立されたものではなからうか。一般的にみて、元禄以降、幕府の行政事務量が飛躍的に増加したため、政務執行のシステム化とともに文書様式の簡略化が進んでいる。その一方では、幕府の制度的整備、確立に伴い、將軍直書の權威づけがはかられ、將軍權威の象徴として体制維持のために機能させられるようになっていた。ここに、近世幕府文書の最大の特徴が認められよう。

同様の事態は諸藩においても進行していただろう。ただ、幕府・諸藩とも、それぞれの内部において日常的に授受される文書、および幕府と諸藩の間で授受される文書には略式化が進んでいたとはいえ、百姓・町人に下達する文書の方は、差紙や用状、手形類を別にすれば、年貢割付状、触廻状、達書、裁許状などの領民支配の基幹にかかわるものには堅紙ないしその継紙が使用されている。これはいうまでもなく、「御上」の御威光を誇示するためにはかわらない。他方、百姓・町人より幕府や藩に差し出す願書や訴状も、堅紙ないしその継紙である。しかし、上申文書以外では、村方文書、町方文書、それぞれの家文書のなかには横切紙、堅切紙ともに多くみられる。書状も近世においては大部分が横切紙（半切紙）やそれを継ぎ合わせたものである（横切紙を長く継ぎ合わせて巻いたものが市販されており、この巻紙を適当な長さに切って使用するのが一般的形態である）。

(二) 冊子型文書の大量出現と多様化

冊子型文書＝帳簿は古代・中世にも存在するが、近世にはそれとは比較にならないほど各組織体において大量に作

成されており、形態も多様化している。近世社会は前代に比べればはるかに情報化の進んだ社会であり、情報の大量伝達と蓄積のためには書付型では間に合わないことが多くなり、そのため大量の帳簿が出現するところとなり、しかも用途に応じて最も機能しやすい形態に工夫されたので、多様な形態に分化していったのである。

帳簿は外観の形状のみに着目すれば、縦帳と横帳（横長帳、横半帳）とに大別できる。しかし、帳簿の特徴は、和書とは違って料紙の使用法が統一されていない点にある。和書の場合、粘葉装（胡蝶装）や綴葉装^{（34）}以外は折目が左側にくるように、つまり左小口が袋状になるように料紙の使用法は統一されているので、外形のみから「大本」「中本」「小本」「杢形本」「横本」「縦長本」と称しても差し支えない。これに対し帳簿の方は、料紙の使用法がまちまちである。したがって、帳簿については、料紙の使用法も含めて類型化し、形態名称を概念化する要がある^{（35）}。

筆者は現在、信州松代城下の松代藩御用達商人であった八田家に伝来した文書群の整理を進めているが、帳簿の料

表1 「史料館所蔵史料目録」での帳簿の形態表記用語の改正一覧表

従来の目録での用語		八田家文書目録での用語	
半（半紙判）	→	半（半紙縦折判）	①
		半切（半紙縦半裁判）	②
		半列（半紙縦折紙列帖装）	③
美（美濃判）	→	美（美濃縦折判）	④
		美切（美濃縦半裁判）	⑤
		美列（美濃縦折紙列帖装）	⑥
横長半（半紙横長判） 〈美〉〈美濃〉	→	横長半（半紙横折判）	⑦
		〈美〉〈美濃〉	
		横半半（半紙横折紙半裁判）	⑧
横半半（半紙半裁横長判） 〈美〉〈美濃〉	→	〈美〉〈美濃〉	
		横半半折（半紙横折紙半折判）	⑨
		〈美〉〈美濃〉	
		横切半半折（半紙横切紙半折判）	⑩
		〈美〉〈美濃〉	
		横切半列（半紙横切紙列帖装）	⑪
		〈美〉〈美濃〉	
		横半列（半紙横折紙列帖装）	⑫
		〈美〉〈美濃〉	
		縦半半（半紙縦折紙半裁判）	⑬
		〈美〉〈美濃〉	

紙の使用法に着目してみたところ、従来の形態の類型化と表記用語ではなはだ不十分であることに気づいた。そこで、〈表1〉の右側のように、料紙の使用法も含めて形態を類型化し、表記用語を概念化してみた。左側は従来の『史料館所蔵史料目録』での表記用語であるが、これは帳簿の外形のみを基準とし、それに半紙判、美濃判に代表させて大きさの大概の表示を組み合わせたものである。ところが、料紙の使用法の差異も勘案すると、帳簿の形態はさらにいくつかの類型に区分できるのである。とりわけ、これまで「横半半」「横美半」と表記してきたもの、いわゆる横半帳に、それが顕著である。〈表1〉の右側に示した諸形態は、帳簿の工程を考えると〈図1〉のように系統化できる。

縦帳の場合、左小口が袋状になっている点では和書と同様であるが、稀には②と⑤のように堅切紙を用いた帳簿もみられる。和書と帳簿で著しく料紙の使用法が異なるのは、横本と横帳である。横本では左小口が袋状になっており、帳簿では⑬がこれに相当する。しかし、料紙の使用法からすると縦帳の一種であるので、帳簿の形態としては⑬は縦帳の範疇に入れたほうがよいのではなからうか。通常の横帳は折目が下にくる。つまり、下小口が袋状になる。しかし、なかには⑦の左側の帳簿のように折目が上になっているものも稀にはみられる。

八田家文書では、「野帳」と題された葬儀参会者の名面帳が三冊とも上小口を袋状にされている。「野帳」という題名から知られるように、これは屋外で使用された帳簿である。屋外だと上小口が開いていると風をはらむので、これを防止するという機能上の配慮もあったであろうが、凶の時の使用帳簿であるゆえ、通常とは逆にしたという観念上の問題も含んでいるように思われる。綴紐も通常の帳簿はほとんど裏側で結んであるのに対し、この「野帳」では三冊とも表側で結んであるのも、そうした観念と関連しているようである。これなどは折目や結び目の位置自体も史料の意味をもっている例である。

史料館研究紀要 第二二號



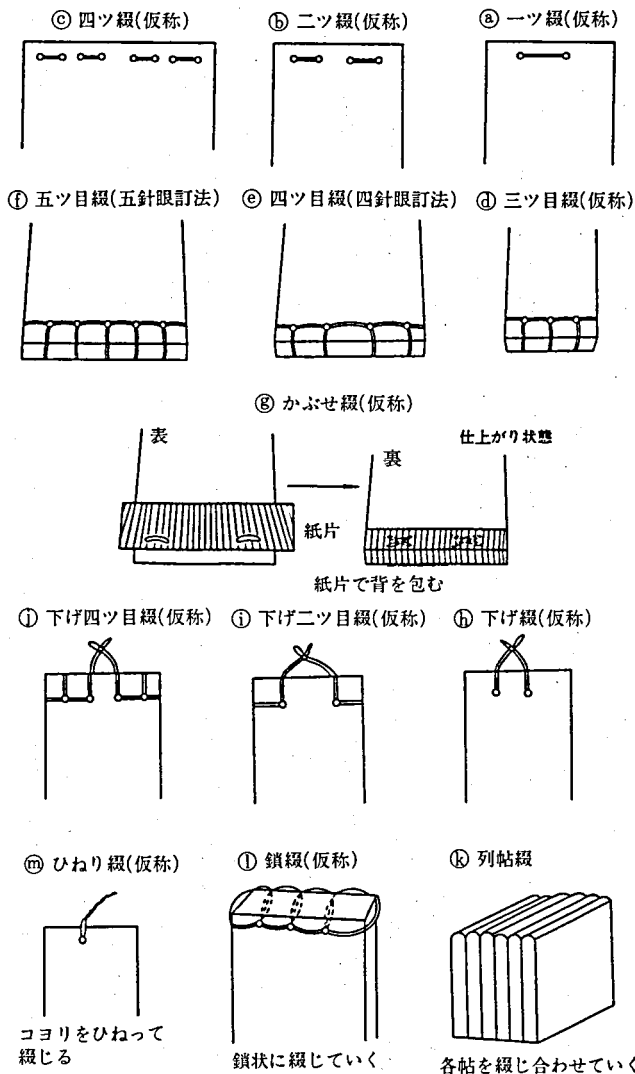
列帖装は、料紙を数枚を重ね合わせて堅平折、一括りとし、数括りを綴じ合わせたものである。和書でも綴葉装のことを列帖装と呼ぶこともあるようだが、これはかなり薄い本で、装飾的意匠としての意味合いが強い。これに対し帳簿の列帖装はかなり厚く、「金銭出入帳」や売買・金銭貸借等の当座記録である「当座帳」のように大きな記載容量を要するものに用いられている。しかも背がアコーディオンのように弾力性をもっているので、いくら帖数を増やしても開きやすいという、きわめて機能的に作られた帳簿で、商家の帳簿によくみられる形態である。厚いものになると一メートル以上に及ぶ列帖装の帳簿も存する。そうした帳簿によって、近世の商家は営業にかかわる情報を蓄積し、管理していたのである。一方、通帳には、持ち運びに便利のように⑨の形態の薄いコンパクトな横半帳が使用されている。

このように帳簿の形態はその帳簿の機能と密接に関連しており、用途に応じて最も機能しやすい形態に創意工夫され、種々の形態に分化していったのである。したがって、帳簿の形態を機能との関連で系統的に研究して見る必要がある。なお、帳簿の列帖装の大部分は横半帳であるが、稀には③・⑥のように堅帳の形態もみられる。横帳では既述のようにたいてい下小口が袋状になっているので、この袋の中に関連の証文や書状を挿入し、一体として管理している例が多い。ここにも帳簿の機能性がうかがえる。つまり、折目の位置も機能的に考慮されているのである。

ところで、右の表記用語では列帖装以外は綴じ方は勘案されていない。しかし、綴じ方も帳簿の形態の重要な構成要素であるので、これについても、その種類を研究し名称を確定していかなばならないだろう。試みに、八田家文書の帳簿にみられる綴じ方の種類を〈図2〉に示しておこう。ただ帳簿の綴じ方の名称はいまだ確立されていないので、書誌学の用語で帳簿にも適用できるものはそれを採用し、それ以外は仮に命名しておく。

⑧の綴じ方は俗に「袋綴じ」と称されているが、書誌学では左小口を袋状にした綴じ方を「袋綴じ」と呼んでいる

図2 帳簿の綴じ方の種類 (八田家文書の場合)



- 綴 紐 の 種 類 —— コヨリ(細, 太), 平紙紐, 麻紐, 水引等
- 結 び 方 の 種 類 —— 本結び, 片結び, 蝶結び等
- 結 ぶ 位 置 —— たいてい裏側で結ぶが, 表側の場合もたまにあり。
また, 同じ側でも中央, 右穴上, 左穴上の差あり。

ので、混同を避けるため、ここでは「かぶせ綴じ」と仮称した。これは綴じ目が見えないように工夫された丁寧な綴じ方で、重要帳簿に用いられている。これに対し、簡略に綴じたものは書誌学では「仮綴じ」と称されており、これでいくと①・②・③・④は「仮綴じ」の範疇に含まれる。しかし帳簿ではこれらが一般的な綴じ方であるので、「仮綴じ」で一括せずに、それぞれ固有の名称を与えたほうがよいと考え、仮に命名しておいた。⑤・⑥・⑦は料紙がはずれにくいようにした綴じ方である。このうち⑥・⑦は和書で一般的に用いられている綴じ方であるが、帳簿でも稀にはみられる。

⑧・⑨・⑩は帳場に掛けたり、手や腰にぶら下げて持ち運びできるように工夫された綴じ方で、「当座帳」や「通帳」に用いられている。これらは左右を綴じたうえで下げられるよう上方で結んだものであるが、このほか⑪や⑫のような綴じ方をしたのちに別個に下げ紐を付けている例も存する。綴じ方からその帳簿がどのような使われ方をしたかがわかることも多いのである。

⑬はぶ厚い堅牢な帳簿の綴じにみられ、綴紐にも麻紐が用いられている。⑭の列帖綴も普通の糸では切れてしまうので、細い麻紐が使われている。あまり厚くない帳簿はコヨリや平紙紐で綴じられているのが一般的であるが、「棚卸勘定目録」は祝儀用の紅白の水引で綴じられ、裏表紙に「千秋万歳」と書かれている。黒字、赤字にかかわらずである。そこには家業繁栄への切実な願いがこめられているのであり、綴紐の種類そのものも史料の意味をもっている一つの例である。ここで例示したのは八田家文書の帳簿で確認できた綴じ方に限定しており、近世の帳簿にはこれ以外にも様々な綴じ方が見出だせるであらう。

以上のように、帳簿の形態や綴じ方も様々な情報・史料価値を有しているのであり、これについても史料学的な研究の対象としていかなばなるまい。概して、近世文書については、その形態論的研究はなおざりにされてきたとい

える。書付型文書に関してでさえ、幕府や藩の一部の文書についてはその形態にも分析の手が入れられているものの、全体的には手つかずの状態にある。⁽³⁷⁾

近世文書の形態論的研究を進めるためには、まず文書目録において、形態に関する記述を充実させる必要があろう。⁽³⁸⁾ そうしておけば、研究者は自分の見たい形態を検索できる。のみならず、文書目録そのものをデータベースにして、どのような用途の文書にどういう形態が用いられているかを統計的に研究することも可能である。ただ、書付型文書については、従来の古文書学でその形態名称が確立されているが、冊子型文書の形態名称はほとんど確立されていない。先の私案は、今後、冊子型文書の名称を確立していくためのたたき台になればと思い、提示してみた次第である。ところで、文書の形態についての研究を行うには、まずもって整理の段階で形態のもつ情報価値を損ねないよう注意することが大前提となる。したがって、整理者は文書の原形を尊重し、それを勝手に改変したり加工したりしてはならないのである。

なお、文書の形態の構成要素には、封式、付箋や素材も入る。封式には折封、捻封、結封、切封、糊封がある。折封は本紙をそれよりも長い紙でもって包み、上下の両端を裏へ折り返したもので、本紙を包んだ懸紙は包紙、封紙ともいう。近世では、領知判物・朱印状、御内書、老中奉書などの格の高い文書や重要文書にはこの折封が用いられているが、最も一般的にみられるのは簡便な糊封であり、書状の大部分はこれである。糊封には、本紙を折りたたんで末尾の部分に糊付けするものと、懸紙で包んで、それに糊付けするものがある。近世文書には文書事務の簡略化の方便として付箋が多用されているのも特徴の一つで、貼る位置によって名称と機能を異にしている。これについては藤田 覚氏の優れた研究があるので、参照していただきたい。⁽³⁹⁾ 文書の素材には紙が用いられるのが普通であるが、近世文書の料紙の特徴については次節で述べることにしよう。

〈注〉

(1) 本稿は国文学研究資料館史料館主催「史料管理学研修会長期研修課程」で近世史料論総論の一環として述べたことをもとにしている。未熟な点が多々あり、文章化して公表するにはためらいを感じるのであるが、研修会の講師を依頼した方々には講義内容を論文としてまとめて発表していただけるようお願いしている手前、私も責めをふさぐ意味で、恥をしのんで公表する次第である。大方の御叱正、御教示を仰ぎ、今後講義内容を充実させていきたいと考えている。

講義では文書以外の近世の諸史料についても述べているが、これについての論文化は他日を期し、本稿では文書論に絞ることにしたい。ちなみに、近世に発生した諸史料を総体的にみた場合の特徴として指摘した諸点を列記すれば、次のごとくである。

- ① 統一権力による国土把握のための土地台帳・国絵図の調製とその他の各種土地台帳・絵図の大量作成
- ② 各種組織体における文書的大量作成
- ③ 系図・由緒書の作成、歴史編纂、地誌編纂の盛行
- ④ 貨幣の大量発行——金銀銭貨、藩札、私札
- ⑤ 書籍の大量出版
- ⑥ かわら版の発行
- ⑦ 番付の盛行

近世文書論序説(上) (大藤)

⑧ 落書的大量発生

⑨ 民衆的歌謡の流行

⑩ 絵画の大量製作と大衆化

⑪ 身分・職能に応じた習俗の形成、家屋の造成、景観の形成、生活・生産用具の製作と使用

⑫ 近世的地名の発生

⑬ 石塔墓碑建立の一般化——小農民の家が自立性を強め、先祖祭祀の主体となる。

なお、人類がこれまでに生み出してきた様々な歴史的情報資源＝史料の総体的、通時的把握と考察は既発表の拙稿「史料と記録史料学」(『記録と史料』第一号、一九九〇年、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会刊)で試みているので、参照いただければ幸いである。

(2) 網野善彦氏「日本の文字社会の特質をめぐって」(『列島の文化史』第五号、一九八八年、日本エディタースクール出版部)。網野氏は、社会の内発的な文字受容の努力に支えられながら、律令国家以来の国家の文書主義の主導のもとに文字が社会に普及していき、それゆえ、文書の全国的な斉一化がもたらされたとされている。そして、織豊期から江戸幕府の確立に至って国家の文書主義は最も徹底したのものになっていったと、近世を位置づけられている。

(3) 青木美智男氏「近世の文字社会と村落での文字教育をめ

ぐつて」(『信濃』第四二卷第二号、一九九〇年)は、右の網野氏の論考、および『長野県史』通史編第四卷(一九八七年)、同第五卷(一九八八年)での塚本 学氏や青木 歳幸氏の村方文書、庶民の生活、文化についての叙述に触発されて書かれたものであるが、青木氏はこの論文において、村方文書作成の前提になる村落での文字教育の推移をたどり、そこから近世の村方文書論にアプローチされている。なお、青木氏がこれより先に発表された「民衆的立場からの近世地方文書論」(同氏『文化文政期の民衆と文化』文化書房博文社、一九八五年。歴史科学協議会編『歴史科学への道』〈校倉書房、一九七六年〉に初出)では、近世の村方文書はなぜ作られ保存されたかという根源的な問題を踏まえて、近世村方文書の性格に多面的に言及されており、本稿執筆にあたっても多くの示唆を得させていた。た。

(4) 座談会「近世情報社会の展開を探る」(『歴史公論』第四号、一九八五年)での山本武利氏の発言を参照。

(5) 網野氏前掲論文。

(6) 近世に入り、一般の小前百姓の間にも文字学習の欲求が高まったことは、柴田 純氏「近世前期における学文の歴史的位置」(『日本史研究』第二四七号、一九八三年)で明らかにされているところである。

(7) 白川部達夫氏「幕末維新期の村方騒動と主導層」(地方

史研究協議会編『茨城県思想・文化の歴史的基盤』雄山閣、一九七八年)では、常陸西部の農村における「事好の者」「小賢しき者」「有志」などと称される者の輩出と、その活動について具体的に考察されている。彼らのなかには、「佐倉記」を読み、天狗党拳兵に参加するなど政治意識に目覚めた行動を展開したり、村請制支配を否定するような主張をなす者もいたという。

(8) 話し言葉の地域的違いの壁を越えて書状による民衆間の広範なコミュニケーションが可能になったのは、書き言葉、書風、書体、文体などが全国的に標準化していたことが前提になっている。それは後述するように国家の文書主義がもたらしたものであるが、しかしその結果、幕府や藩の発する触を媒体とした公式の情報伝達とは別個に、民衆独自の自律的な情報伝達の広範な展開を可能にしたのである。

近世の民衆は決して官製の触情報のみで政治・社会の動向を判断していたのではない。例えば大塩の乱にしても、その檄文や蜂起の理由、その状況に関する情報が民衆の間に広く伝播しており、幕府がいくら触で悪逆の徒と決めつけようと、その社会的影響力を阻止しえなかったことは周知のところである。また、百姓一揆の際には、村々に参加を呼びかける廻文が発せられ、広域的な一揆集団が形成された。こうした事実を踏まえるならば、網野氏のように近世の民衆が国家の文書主義の枠組を突破しえなかったと割り

切ることではできないのではなからうか。民衆の間に文書主義が普及するのに国家の文書主義が大きな役割を果たしたのは確かであるが、しかしそのことによって民衆にどのような新たな可能性が切り開かれたかに留意しつつ、民衆の文書主義と国家の文書主義とはどの面で連関し、逆にどの面で矛盾・対立していたかを考察しなくてはならないだろう。

(9) 例えば、羽州村山郡谷地郷およびその周辺の村々（現、山形県西村山郡河北町）で結成されていた契約講では、近世中期以降、講の成員が入手した村内外の様々な情報を講帳に記録するようになっており、今日に伝えている（拙稿「地域とコミュニケーション」、『地方史研究』第一八五号、一九八三年、参照）。これは地域共同体として情報の収集・蓄積に努めた例であるが、商人や農民が家業経営を維持・発展させるために天候、作物、商品相場、災害、政治の動向等々に関する情報を広範囲にわたって収集し、それを記録して家として蓄積したもの、商家や農家に伝来した文書のなかに多く見出だせる。

(10) 民衆の政治・社会意識の高まりは落書の大量発生となっても現れる（紀田順一郎氏『落書日本史』へ三一書房、一九六七年）で系統的分析が試みられている。落書は近世前にもみられるが、近世に入り一七世紀中期の慶安頃から量的に多く知られるようになっていく。そして、將軍綱吉の生類憐み政策への批判を契機に益的・質的に飛躍的な成

長を遂げ、近世中期以降は民衆の政治・社会批判の手段として広く定着し、それがロコミあるいは書写によって広く流布し、「世論」形成にも大きな力を発揮した。

なお、林基氏「近世民衆の社会・政治思想研究の史料的基础」(一)・(二)（『専修史学』第五・六号、一九七三年、一九七四年）では、近世民衆の社会・政治思想を知りうる文字表現あるいは口頭表現の諸史料を史料学的に検討されている。

(11) 幕府、藩における意思決定のシステムについては、笠谷和比古氏「日本近世社会の新しい歴史像を求めて」（『日本史研究』第三三三号、一九九〇年）で原理的考察がなされている。

(12) 幕命・法令の伝達は近世前期には口頭伝達の比重が高かったように、諸藩への伝達も大名ないし大名家の留守居役を江戸城中や評定所などに召集し、將軍・老中・奉行衆から口頭で伝え、そのうえでその覚書の書付を交付するという方法がとられていた。しかし、一七世紀末、元禄頃から文書による伝達がシステム化されている（高木昭作氏「近世史研究にも古文書学は必要である」へ永原啓二他編『中世・近世の国家と社会』東大出版会、一九八六年、日本歴史学会編『概説 古文書学』近世編（吉川弘文館、一九八九年）第一章三の笠谷和比古氏執筆部分、藤井譲治氏「元禄宝永期の幕令」へ『論集 近世史研究』京都大学近

世史研究会、一九七六年〕参照。なお、藤田 覚氏「近世幕政文書の史料学的考察——付札・書取・承付を中心に——」〔『古文書研究』第三三号、一九九〇年〕では、老中のもとに奉行・大名から差し出された伺書や願書がどのようなシステムで処理され、どういう方法で回答・指図がなされたかを文書論的に分析している。

(13) マックス・ウェーバー(世良晃志郎氏訳)『支配の社会学』Ⅰ(創文社、一九六〇年)第三節参照。

(14) 大野瑞男氏「幕府勘定所勝手方記録の体系」(『史料館研究紀要』第五、六、七号、一九七二、七三、七四年。日本古文書学会編『日本古文書学論集』近世Ⅰ(吉川弘文館、一九八七年)に再収)は、こうした観点から具体的分析を試みた先駆的、画期的業績である。この論文では、幕府勘定所勝手方において作成、授受された種々の帳簿や書付のうち財政に関するものの基本類型を示し、その性格、機能様式などを検討するとともに、勘定所、代官所、村・町方との間の相互授受関係を体系的に考察している。とりわけ、復原的手法によって勘定所勝手方の職務にかかわる文書の体系を明らかにしようという試みは、幕府文書の大部分が焼失してしまっている現在、貴重な方法論的提示である。大野氏はまた「幕府領貢租・財政史料の体系」(『史料館研究紀要』第一〇号、一九七七年)において、真田家文書中の大名預所の貢租・財政関係文書について、その相互関

係を考察している。

注(12)にあげた藤井、藤田両氏の論考も、システム論的観点からの幕府文書論としての性格を備えている。一方、藩の文書は大量に伝存しているので、体系的な文書研究を行うのに素材的には恵まれているのであるが、そうした志向性をもつ具体的研究成果は出されていないのが現状である。

(15) 桜井英治氏「日本中世商業における慣習と秩序」(『人民の歴史学』第九四号、一九八七年)。

(16) 民間において取り交わされる証文には、公儀の法度・政策にかかわらず契約内容を守ることを明記している例も少なからず見出だせる。いくつか例をあげておこう。

④駿河国駿東郡大御神村の源次郎が宝永四年(一七〇七)一二月に男子源太郎を甲斐国郡内山中村与惣兵衛方へ一四年季の契約で奉公に出し、身代金として金二分を借用した際の請状には、源太郎がもし欠落した場合は人主・請人が必ず尋ね出し、身代金の倍額を出して償うこと、および「縦年季之内御国替・人返しとか様の御法度御座候共、定之通少も違乱申間敷」奉公を全うさせることを約している(静岡県駿東郡小山町大御神 天野憲一氏所蔵)。

⑤米沢藩領の出羽国置賜地方の事例であるが(②、③、⑥も同)、明和五年(一七六八)一二月、伝四郎なる者が鈴木儀兵衛より身代錢六貫文を借用し、男子雲四郎を一年

季の奉公に出すことを約した証文には、「夜白無嫌急度御奉公為致可申候、第一御公儀御仕置道如何様ニ相替り候共、此証文之通り少も為相背申間敷候」と記してある（『山形県史』近世史料Ⅰ、九七六年、五一〇頁）。

④寛文二年（一六六二）一月、伝蔵・与兵衛より与右衛門宛の田畠永代売渡証文には、「於以来ニ子々孫々迄かまい無御座候、御国替新儀之徳政如何乃儀御座候共、右条々少も相違無御座候」とみえる（同前書三六七頁）。

⑤元禄一四年（一七〇一）二月、次兵衛・清十郎より松木八郎兵衛宛の畑永代売渡証文には、「我々勝手以如此永代ニ売渡申上ハ、我等共子々孫々ハ不及申ニ、一村共ニ構無御座候、自今以後御国替如何様之義出来仕候共、少も違乱申間敷候」とみえる（同前書三六七頁）。

⑥安永三年（一七七四）十二月、喜八より十兵衛宛の屋敷畑五ヶ年季売渡証文には、「年季明本代相済候ハ、右地方御返し可被成候、若其節請兼申候ハ、流地ニシテ相渡可申候、御世上如何様之義御座候共、証文之通少も違乱無御座候」とみえる（同前書三六八頁）。

⑦では徳政文言があるのが注目されるが、これは中世の売券・借券・質券その他の私的契約文書のみならず、近世初期の土地売渡証文にも各地で見出だしうるものである（寶月圭吾氏「信濃における近世初頭の徳政文言について」『信濃』第一六卷第三号、一九六四年、『日本古文書学論

集』近世Ⅲ（一九八七年）再収）。近世初期にはまだ徳政の実施によって契約が破棄されるかもしれないという危惧が買得人にあり、そこで、たとえ徳政が実施されたとしても土地は取り戻さない旨の保証文言を証文に明記させたのだらう。

近世の民間において取り交わされた種々の証文を注意深くみれば、公儀の法度・政策よりも当事者相互の契約事項の遵守を優先させるような保証文言を明記したものは多く見出だせるであらう。それは、民衆社会の文書主義が国家の文書主義、公法的秩序に必ずしも完全に包摂され、規律されていたわけではないことを示している。しかし一方、契約証文が民衆社会において全き効力を発揮しえたわけではないことにも留意しなくてはならない。例えば百姓にとつて最も重要な財産である田畑屋敷の売買・質入れにかかわる証文の場合、証文に記された文言にかかわらず、検地帳で名請けしている者およびその子孫は、何年経過しようとも、売渡あるいは質入れ地を元金さえ返済すれば請け戻せる慣行が全国的に広く形成されており、そのため証文の効力と慣行的な請け戻し権との矛盾を生じ、多くの出入が発生しているのである（白川部達夫氏「近世質地請戻し慣行と百姓高所持」、『歴史学研究』第五五二号、一九八六年）。したがって、近世民衆社会における文書主義の固有の特質を、国家の文書主義、公法的秩序との関係のみならず、社

会の慣行・規範との関係にも留意しつつ、掘り下げて検討しなくてはならないだろう。その際、社会構造や社会的諸関係の変化を踏まえる必要があることはいうまでもない。

- (17) 青木氏前掲「近世の文字社会と文字教育をめぐって」では、近世前期には村落に定住した僧侶が手習い指導を行っており、これが寺小屋教育の原初的形態であったこと、および村民らが自前で師匠を招き費用を分担しあう形態もみられたこと、を指摘されている。近世中期以降の民間教育機関の増加状況については従来史研究で明らかにされているところである。

- (18) 布川清司氏『近世民衆の暮らしと学習』（神戸新聞社出版センター、一九八八年）、高橋 敏氏『日本民衆教育史研究』（未来社、一九七八年）、同氏「村の手習塾」（『週刊朝日百科 日本の歴史』別冊六、朝日新聞社、一九八九年）、同氏『近世村落生活文化史序説』（未来社、一九九〇年）、中内敏夫氏『新しい教育史』（新評論、一九八七年）、吉田 勉氏『文書・絵馬・石造物に見る近世大宮の生活・文化・教育』（大宮市立博物館、一九八九年）等を参照されたい。

- (19) 拙稿「身分と家」（『講座 日本近世史』第三巻、有斐閣、一九八〇年）、同「農民の家と村社会」（共著『日本家族史』梓出版社、一九八九年）。

- (20) 網野氏前掲論文。

- (21) 木村 礎氏「寛永期の地方文書」（北島正元氏編『幕藩制国家成立過程の研究』吉川弘文館、一九七八年。『日本古文書学論集』近世Ⅱ（一九八七年）に再収）。

- (22) 以上についての史料学的な研究成果に関しては、『日本古文書学論集』近世Ⅱ所収の諸論文、および大野瑞男氏が解説であげられている文献を参照されたい。

- (23) 『御用留』について史料学的分析を試みたものとしては、次の論考がある。大口雄次郎氏「天保期の御用留」(一)〜(四)、『茅ヶ崎市研究』第四、六、七、八号、一九八〇、八二、八三、八四年。藤岡 修氏「御用留について」(『神奈川県史研究』第五〇号、一九八三年)。森 安彦氏「御用留」の性格と内容について」(一)・(二)・(三)『史料館研究紀要』第一九、二一、二二号、一九八八、九〇、九一年。岩田みゆき氏「武州足立郡新染村守富家の御用留」(一)・(二)『浦和市史研究』第一五、一六号、一九九〇、一九九一年。
- (24) 安澤秀一氏『近世村落形成の基礎構造』（吉川弘文館、一九七二年）は、農村に伝存している近世文書相互の関係を体系的に考察することを通じて、領主支配のシステムと農民の日常生活秩序を解明することを試みたもので、近世村方文書の史料学的研究としても優れた内容を備えている。しかし、この著書で安澤氏が提示された視点は、正當には評価、継承されておらず、村方文書の体系的把握への志向性はいまだに稀薄である。

そうしたなかで注目すべき業績として、矢澤洋子氏「近世村落と村財政」(『史学雑誌』第九四編第一〇号、一九八五年)をあげておきたい。この論文は、「村」財政を「村」が果たす諸機能に伴う経済行為の全過程ととらえる立場から、近世後期の高島藩領の村で作成された村財政関係諸帳簿の性格とその相互関係を分析することを通じて、村財政の構造、および領主の村財政観と農民の村財政観の相異、近世の村の性格などを見事に解明しており、近世村落論の進展にとって史料学的研究が不可欠なことを改めて教えてくれる。また、『越後国頸城郡岩手村佐藤家文書目録』(『史料館所蔵史料目録』第三八集、国立史料館、一九八三年)の安藤正人氏による解題では、岩手村での年貢・諸懸の割付・徴収にかかわる文書作成の手順と文書相互の関係の体系、および年貢・諸懸関係の主要帳簿の変遷、そして佐藤家の地主としての経営にかかわる諸帳簿の関係とその変遷などの分析結果が提示されており、佐藤家伝来文書群の体系を示した目録本文と併せて、優れた史料学的研究成果と評価できる。

(25) したがって、藤沢 勇氏が「地方文書と近世史研究」(『広島県史研究』第七号、一九八二年、『日本古文書学論集』近世Ⅱに再収)の中で、支配領域を単位に地方文書の成立および文書相互の関係の体系を考察する必要があることを提言されているのは、正鵠を得ているように。

(26) 文書の種類や文書相互の関係についての検討は、現に伝存している文書のみ分析では不十分である。なぜなら、実際に作成ないし受領した文書のすべてが保存されたわけではなく、当時の人々が不用と認定したものは意図的に廃棄されているからである。また、いうまでもなく、伝来の過程で火災である時期の文書が焼失してしまったり、何らかの理由で一部の文書が紛失、湮滅あるいは散佚しているケースも少なくない。したがって、当時における文書の保存・廃棄の原則、文書の伝来の歴史などを踏まえ、他の関係諸史料を参考にしながら、実際に作成ないし受領された文書を確定していく手順が求められる。

(27) 藤田 覚氏「近世幕政文書の史料学的考察」(『東京大学史料編纂所報』第二四号、一九九〇年)。

(28) 大野瑞男氏「領知判物・朱印状の古文書学的研究」(『史料館研究紀要』第一三三号、一九八一年、『日本古文書学論集』近世Ⅰに再収)。

(29) 以上、伊木壽一氏『増訂日本古文書学』(雄山閣、一九七六年)六六―六七頁、飯倉晴武氏「古文書の形式」(『日本古文書学講座』第一巻、雄山閣、一九七八年)参照。

(30) 藤田 覚氏も切紙文書の多さを近世文書の特徴の一つとして指摘されている(注27の論文一四頁)。

(31) 大野瑞男氏は前掲「領知判物・朱印状の古文書学的研究」で、寛文四・五年の家綱の領知判物・朱印状の様式上の特

徴として次の点を指摘されている。①その書札礼は秀吉や家康・秀忠・家光の徳川三代のそれと比較すると薄礼であるが、料紙には室町期の檀紙に比べてはるかに大きくて厚い大高檀紙の堅紙が用いられるなど、將軍権力の強化、權威の確立を反映した書札礼が確立している（それが宛先の格式に対応していることは先に紹介したところである）。

②領知判物・朱印状は室町幕府の御判御教書の系譜を引くもので、公帖も同様である。ただし、戦国大名の印判状使用や信長・秀吉の折紙・朱印状多用の方式の影響を受け、とりわけ家康の場合にそれが顕著である。しかし、幕藩制国家の確立に従い御判御教書の様式が復活せしめられたことは、江戸幕府Ⅱ徳川將軍が室町幕府Ⅱ足利將軍の正統な継承者であることを誇示せんがためと思われ、これに印判状を併用することにより、判物・朱印状・黒印状という序列が生じた。

なお、徳川將軍の直書に「御内書」と称せられたものが存する。これは大名よりの献上物に対する返礼に用いられた。寛永一〇年（一六三三）以降、幕府の制度が整うに伴い御内書の様式も統一化されるようになり、一般的には黒印が使用され、用途も端午・重陽・歳暮の三季に祝儀として諸大名より將軍に献上された衣服への返礼に限定されるようになった。ただ、宛所が参議以上の大名や本願寺などの門跡の場合には、目下に花押を据え、書止めに「謹言」

を入れるなど厚礼になる。御内書の料紙には大高檀紙が用いられ、折紙の形態をとる。この御内書は將軍と諸大名との儀礼的關係において重要な役割を果たしており、これを下賜されることは一人前の大名として將軍に認められたことを意味した（以上、前掲『概説 古文書学』近世編第一章二・二「御内書」へ上野秀治氏執筆）参照。

右のように近世には徳川將軍の直書の權威づけがはかられる一方、幕府の日常政務で作成、授受される文書の方は略式化が進むところに特徴がある。

(32) 老中下知状は書止め文言が「依仰執達如件」あるいは「仍執達如件」となっており、様式的には中世の御教書の系譜を引いているが、近世には「下知状」と呼ばれている。

(33) 注(12)の藤田 寛氏の論文、および同氏「付箋、その名称と機能」（『東京大学史料編纂所報』第二二号、一九八八年）参照。ただ、大名よりの内々の伺書や願書に対する老中内々の回答は「御書取」と称する半切紙文書でなされている（前者の論文参照）。

(34) 粘葉装は、料紙を堅に半折して、各料紙の折目の外側の部分に糊をつけて貼り合わせたもの。綴葉装は、料紙を数葉重ね合わせて堅に半折し、これを一括りとして、数括りを折目の側で綴じ合わせたもの。両者とも折目は右側にくる。

(35) この点については、すでに原島陽一氏が提起されている

〔冊子型史料の形態表示について〕、『史料館研究紀要』第一四号、一九八二年。以下、本文で述べる形態表記用語の改正案は、原島氏の提言を受けとめて、その具体化をはかったものである。

(36) 川瀬一馬氏『日本書誌学用語辞典』(雄松堂出版、一九八二年) 参照。

(37) 前掲『概説 古文書学』近世編をみても「朝廷・公家関係」「將軍関係」「幕府関係」「藩関係」の項目に入れられた文書の多くは形態についても解説されているが、「地方関係」「町方関係」「私的文書」の項目の文書では、形態にはほとんどふれられておらず、関心さえ払われていない。

(38) 概して、従来の文書目録では、文書の形態表記にはあま

り意が払われてこなかったといえる。そこには、利用者は文書の内容によって検索し、形態にはそれほど関心を寄せないだろうという、暗黙裡の前提があるように思われる。形態に限らず、利用者の関心が多様化してくると、従来の目録で採録していた情報記述では間に合わなくなるので、アーキビストの側もそれへの対応が迫られてこよう。例えば後で述べる血判、爪印、拇印にしても、最近ではそれ自体を研究対象にするようになっている。また、漢字主体文か平仮名主体文か片仮名主体文かという点にも関心が払われはじめている。しかし、従来の文書目録の記述では、そうした観点からの検索は不可能である。

(39) 前掲「付箋 その名称と機能」